八宗起原釋迦實録

四

へ13
4036
4

八宗起原釋迦實録巻之四

東都　鈴亭谷峩譯述

二十二　耶輸陀羅女群疑を蒙る并提婆瀉慾を逞くせ

再説車匿が言上を。群臣疑惑せざるも亀けまど。玉鑑の裡ふ屠間しのふ。淨飯王のゝ往昔。感得しぬゝ。霊夢ゝ。誕生の瑞應奇特。相師の勘文阿私陀仙が来然を示せし詞といひ。彼此思ひ合しのふふ。余も有ふんと思し。只敢て疑ひのふことを亀く。件の所遺物を取寄ぬくば。所側ふ冊きまのゝを。憍曇弥夫人。之新宮も。車匿の譚を聞ぬひて。斉一涙ふ昊所の。ようと可ふ聲も揃まび。互ふ遺物の品々を。都ふ。當浪邸ぬくば。亀居る女官群臣も。魂ゝ慈然ゝゝぬも亀し。當下淨飯

昭42年12月12日 和田大作 寄贈

0 42 8646

門へ13
4036
4

王い豫てより。法る嘆をい覺朝そと。思しーにぬくども。猶ちん
追慕の陰りあや。沸聲口隱せぬひつ。惠多存ぢおい轉輪王の
位も富も耳從大約活ぢ生るもの。子故ふ選ふい常ぞうし。
貴きも賤たも推あべて。醜態愚癡の子そざふも。愛慈むあらひ
あるふ。況て惡多い二十二相八十種好具足して。聰明睿智萬
技ふ達し。筋力も天下ふ並双ある。麒麟兒あて在けるを。虎狼
蛇蝎の栖ある。深山幽谷ふ獨入ーと。他ふ見て忍びんや。朕も
彼処へ分登りて。俱ふ道を學ぶべし。犍陟牽と寅つば。耶輸陀
羅女も身と就して。喜も左子のちん跡を尋まらんと願ひぬふ
を。三光大臣推止めて。大王の沸退慕い。ちん理ふいーども。君今
国を捨ぬいて。善生王より連綿ぢる。ちん血脈斷絶して。轉輪
王位。他の有とあらん。微臣們熟動ー奉るふ。左子學道のちん

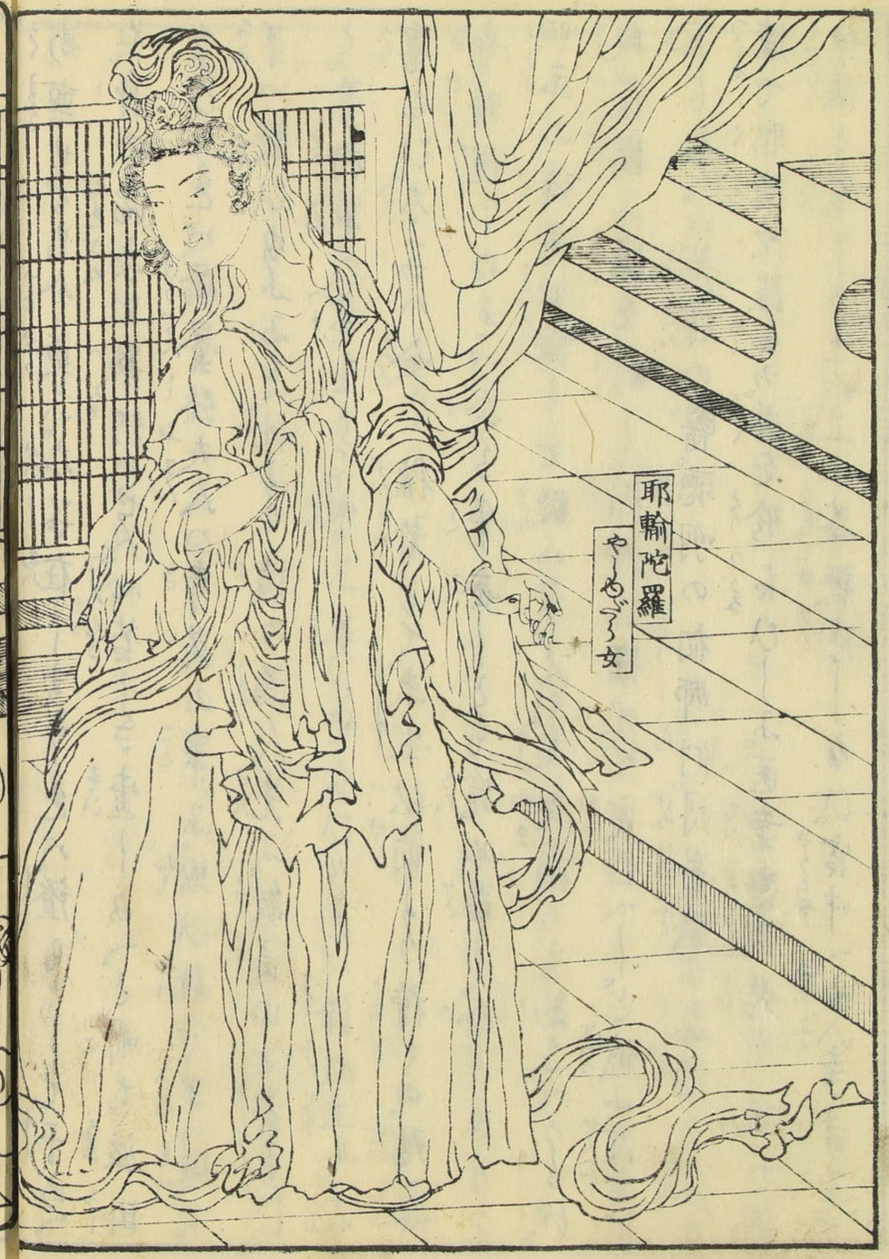
望い一朝一夕の義あいひそで。什麼沸降誕の當日より。奇瑞
ふ側最多きふ。諸天擁護ーぬふこと。疑ふべくもはつねば。況令
深山ふ住ぬふとも。猛獸毒蛇も害ー得ざらん。預ぢい国家の
左ふ。大王憂襟を安めぬひ。左子の沸運を天ふ委ー學ふ道
成就ーぬて。還幸ーぬふ時をこそ。俟せぬくと。蘇まんまば大王
實ぬと思ーにて。耶輸陀羅女を諫めぬひつ。咸是神明忍ある
ものを。人を行刑べうーびとて。車匿ふも舊のごく。犍陟と預
けぬひ。左子ふ還るまで。左も右も。斃もべうーぢと命じぬひて。
暇をぞ賜ぼける。車匿い再生の君恐を。怪ぶこと大うとあーぢ。
馳て階下を退出ーげ。此日より犍陟を。王の如くふ思ひつ。
幸月を經る程ふ。十二年を一ー後ふ。左子成道ーぬひて。王城
ふ還幸ーぬひー時。ちん說法を聽聞ーて。犍陟と共倡ふ得脫

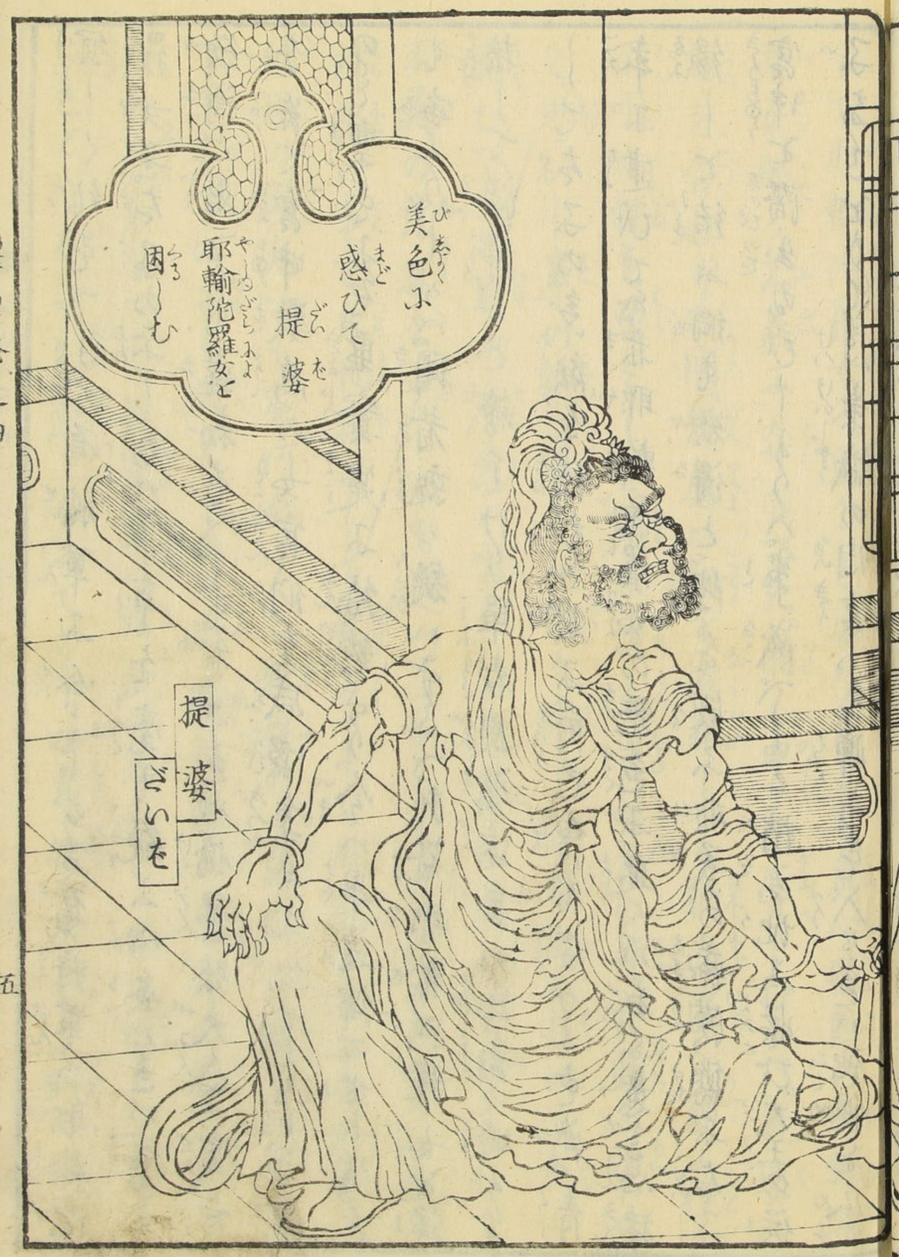
成佛し給ふとぞ。続て澤阪王は大臣の。諫奏を容ゐひて。沛葉は
停り給へども。猶も齊憑は穂ある。たゝい長食を送るべし。
と爲將軍に命じ給へば爲將軍奉りて。道中の途毎に數萬
人の夫役を課せて。米穀絹帛數しく。檀特山へ運ぶんと。頻に
路を急つ。日を重ね月を經て。猶難まで到るしゝ。雲霧海く
立覆ひて。登ること能はざるを。衆人空しく立帰て。由を奏聞し
ぬるに。天王后妃新宮は。若やと憑ふ思ひぬしゝ。たゝの
安否も。あゝまち。苦けれ。路を隔ちゝる。彼靈山は那方よと。聞
ぶに胸の痛むのみ。めさき異を。成道しぬひ。就ち還幸しぬに
ゝと。候ば猶更久形の。空うち仰ぎて。苑を。翼を羨みぬひ
ぬ。風の日雨の夜。雲霜に。就ても專想像。衣の乾く間も。
實に楚辭てふ漢書に。樂きい新に相知るより樂ばい莫哀きい

生て別離より。哀きは莫とあり。国こそ異を人心に異るゝは
うゝまし。斯て三新宮は三時殿より。月景城に移り給て。橋曇
除夫人に仕へつゝ。憂年月を送る役に。統中耶輸陀羅女も
たゝに玉家の家の夜に。胎内の子に因ありて。六年過ねば生て
べゝ。澤の異常を怪しむ。ゝ。ぬひしゝ。詞を別を
奉し。悲しさに。深く。も歎きに沈ゝ。忘て過しも歎あるん
月水こそ見ね其後に。両三年を過ぬ。敢て孕ゝ。密も
あゝ。齊心地の勝ぬきゝ。間あゝ時あゝたゝの上のゝ。想ひつ
けて慕ゝ。心の凝滞あるべしと。他感いゝ自さゝも。然あん
めりと思ひつ。又一年除を經ぬる。夏の頃より日に增て。妊娠しを
覚しゝ。心中悄々地に。愁つ。齋に。たゝの示しぬひし。肉を今更
稟ぬとも。人實事とは思ふまじ。年何はせんと。只一個心を苦しめ

ぬ。ふも。太子のおん車を。忘雜てで彼夜さり。其身のうへふ被置ぬひし。太子の御衣と御遺物の。瑞路を身ふ添て帳内ふの〻引籠。歎たふ鶴夜ぬひしゝが。御々ふ復帳ざゝて。匿むとさまど。今ハさや。女官童女つゝたる御弟家ませしより。既ふ四年除りを經つるふ。彩畫身ふ滅ぬひしハ。誰とろ密通ぬひけん。日頃ハ貞女態て在せしも。忍び難きハ遠道うふ。去ふがゝ孰の間ぬ。已々彰て在ぬ。生るの眼を拔まけり。偖もくどうりふ。ハ不善ふくも潛言と。早くも橋曇弥夫人聞しハて。是ハ異しき風流よ。於も指つき事ふゝしと情々地ふ虛實を糺しぬくバ耶輸陀羅女ハ有繋ふも。敷ふ散敷檐紅葉。秋れゝふくも露とぞふ消まゝぬめとさゝ俯向つ。鶯ふ太子の示しぬひし。問徒の由を語りぬひ。

勅稟せども今更ふ。太子在しまさゞまバ。強もふゝて干めぬ。身の濕衣を爭何ハせん。心苦しき。畫しぬつと。帰ち浪郎ぬひ。ひ〻ぬまバ。橋曇弥夫人ハ奇異の事ふ。思ひ雜つ。羊ハ結ふ。羊ハ疑ひぬふ。他より繟の漏ん先ふ。敏遠由を奏さゞし。と。爲將軍の妻をもて。密ふ奏させぬひ。ぬまバ。淨飯王も不審ぬひ。太子ハ全く權者ふて。未生以前より種くの。瑞應奇特現しぬまバ。ふる事無しとも寃め難し。余りふ。四年の後ふ。妊娠しを疑ハざゝんや。亦病ふも勿るべうゝ。典菜頭ふ脳を盼し。相師ふ觀せて定むべし。と。俄ふ宣旨を下しぬゝバ。尤妹の醫。聰明の相師。月景城ふ參内して。各々筵で耶輸陀羅女の。脉を盼ふ。占ひしふ。医案觀相毫も違ふ。妊娠と寃ひぬ。王ハ益疑惑しぬひ。宮中へ出入まる男子を


耶輸陀羅
やしゅだら女


美色ふ
惑ひて
提婆
耶輸陀羅女を
困しむ
提婆
だいば

宜しく礼をべしと爲將軍ふ命じ給ふ爲將軍い耶輸陀羅女ふ太子の示しぬひし事を毫も疑ふ心無きば有きも欲得と思へども違勅をべくも有ざるば憍曇弥夫人ふ宣旨を告て宮中數萬の女官們を咸喚集めて礼せども各ぞ競の〳〵稟きをぞ重實寔ふ紛然とり今い早這緯の世ふ隱きも無うしてば聞者孰か疑ハざるべき皆耶輸陀羅女を彈指して淫婦よと謗をけり單表提婆達多ハ怨角の時より

して太子の多能を精むが故ふ自己胷も安からぬを淫青年ふ逮びて亦耶輸陀羅女の艶色ふ迷へば狂ふ意ふ心猿縁しを結ぶ綱も欲得と隙を覗ふ非義の痴漢鄙ふ太子宮中を潛出ぬひしよりハ專滅べしと情を地ふ怡び大王の從子ふあるをもて月景城の内宮へも憚らを入らをば他視を餘

して耶輸陀羅女ふ逼ること屠ふをども貞心堅固の耶輸陀羅女耶ふ不義ふ奔るべき。能く罵り辱しむをば。提婆ハ怒を含むりの間。終意ハ切を成雖しと。猶尚隙を窺ふ後ふ不明ぬ種を孕うと聞ふ嫉妬ふ胸の火の厚き情ふ殖ぬや

と思ひ事の影響しい。孰か娘しむ密夫の在ける故か憎むべしと思ふ底意ハ明さねども。恨の遺恨を根ふ持ちて不義の淫振を正しくも。見つる如くふ移行せば世の人毎ふ計役の事を忽地棒ふして。置々しく風説をふぞ彰てハ他国の聞元をも爭何あらんと称花の一族。群臣們と相議を図ふ太子の示し措き由ハ。耶輸陀羅女を身の罪を宥んの為の詭あるべし。異常或ハ理外の理ふぞ。言ハ何とも言べをども。太子出家しぬふてより。四年除りの今ふ到て。妊娠

理りあるべきやハ。法る不正を糺しもせで。罵きを自記と言紛さバ。政道是より廃きなん。称種の一門を汚辱し。耶輸陀羅女が不義をしも。刑ハもとハ有べうもなと。商議既ふ一決して。衆官斉一緯の理非を。浄飯王ふ奏聞しぬるハ。王も疑惑ハ為ぬ。ども。猶罪の軽重を。定め難て在せしが。称種の一族満朝の。群臣咸提婆の與ふ。説惑ハさまて在けるハ。頻りふ事の理非を舒て。改道ふ私あるべ。王法裏へはひあんと。左右の梵志ふ至るまで。咸耶輸陀羅女を刑ひなと。屠奏聞しぬるふそ。寡衆にハ金をくうさ。譬ふ淵を賢明慈悲の。浄飯王も既ふして。眥慮を決めぬひらまへ。如何ある刑ふ行ふべしと。諸臣们ふ勅問しぬ。群臣们相計りて。寡夫の罪軽うねバ。大死しぬくと奏しけり。大王是ふ随ひぬひ

其旨詔命ありけるを。為将軍聞よりも。驚き哀むと大うなる。憍曇弥夫人と相計りて。頻ふ勅命を乞奉るとも。敢て勅許無うしうば。為将軍ハ命を惜まで。借使寡夫在しまそとも。正しき。況ハ。況ハ。孫ふハ。左子の。清愛妃ふ。在しまし。ひ。を。火刑ふ行ハせ。ひ。ひ。除ふ。残酷ハ。そ。飼を尽して。謙養しぬ。ご。王。ん。首を。揮ひつ。王。事。監。ふ。公道ふ。親疎ある。んや。朕。私。言を。耶。容。べき。痍。退。と。烈。く。も。宣ふ。御容常ある。猶。謙。め。奉らば。逆。難も。御座。ん。左右の。梵志们心得て。為将軍を。理ある。も。王座。遠く。推。遣ぬ。當。時耶輸陀羅女の。父。ある。大臣。摩訶那摩。羅。が。猶一族ハ。朝ふ在ども。已身の上の。陳して。耶輸陀羅女の。不幸ようを。稟解りの。垂ある。憂。端正の賢女ある。も。澤の。茲ふ。遠び。

天命あるる哉嘆くべし

廿三 神義婦火坑ふ墮て陽を現ぜ并羅睺羅誕生

耶輸陀羅女ハ今更ふ右子の示しゆひるる。因位の由も却ふ造りし罪を塗匿を調歟言よと謂らるて。疑も解ぜ既ふ畢。正義の罪科ふ陷りて刑罰をべく究ぜて。橋曇弥夫人爲將軍のかふ及ぢぬ嚴令ふ。有司ハ内宮より煙しくも耶輸陀羅女を法場へ引居をべ。隊て刑法ふ備しあるべく地中を九尺左右穿ちし中へ。束ねし柴ふ油を潅ぎて。猛き把も垂く炕の中の羊嵩む猩投入るる火を放てば忽地ふ熾々炎々と燃上る。猛火の中へ耶輸陀羅女を。寒落さんとをるるけるる。他ふ視きて。戰慄焦熱地獄ふ異なるぬ。形勢あるると耶輸陀羅女貞烈傳ふきべ。ところひをねども覺ある。身の濡衣を干めぬ。恨のこゝ歟ぞるふ。

残酷の刑ふ遇ふ。最も敢果ある運命を。思つバ知うぬ前世ふ罪造けん業因の果ある。べしと察ても。身孤あるバ嘆ぶを正しくも胎内ふ宿しを右子の御遺ふと。間ゝ逢をる。親子の縁し浅ましき。死とあん遂る悪報の。深き此身を恨ゆせん。哀し哉と言歯敢ふ。岩走る行滝つ波の。碎けて赤ハ身ふ貞し。汚名を雪く時ありなんと思ひつ赤思ふ妄い。綿露ぞうも。現世で犯せる罪も垂りをバ天の資も垂うゝをやいと。憑むふ甲斐あるく今ハ蚤。猛火の邊ふ引をゆひつ既ふ件の火の中へ突薩さんと云ふるふぞ。耶輸陀羅女聲厲まして。妄ふ不義の覚ある。若此行ありとあるゝバ。胎内の子も燒るべく。若此を右護あゝ。神助もあらば猛火ふも。身を傷らしあるゝと。大誓願を唱へ。あゝ。真言乗も落らぬ程ふ。悔むべし。黒烟天をも焦ゝ炎の中へ。忽地擡と突薩されて。

幾と茂る火の燈。火燄つ。油紫火の燒掇と。烟ふ卷まて立冲る。勢ひ凌競うけまバ。可惜美玉も一塊の。雷炎ふのこ遺るべ
しゃ人咸性の善あるよう。刑吏们さく有繫ふ。鼻をつまうを徑
しもわ〳〵方僅まで爛んふ燒立し。猛火忽地滅ると斉一流の
底より突然と。靈水湧出るふ隨ひて。緑の荷葉衆葩く。水面ふ
生出て。最凌競き猛火の炕も。滌々うる蓮池と変じけり。緯の
不測へ是の〳〵あ〳〵で。荷葉の間より。香氣馥郁と開出し。大
輪の蓮華の上ふ。耶輸陀羅如ハ些も。衣の端さく集へもせを。端
然と坐〳〵ふ。浩る斉特ふ。頑然うる。刑吏们咸腥を清て。是ハ
そも甚麼とだうふ呆まて。一霎時慢然と停立もあり。撞と坐
して。尻めち突も多うう〳〵ふ。徒長視て居とうハと。躰て斉事
の為体を。王宮へ奏〳〵まバ。淨飯王百司百官皆驚き訝まて。

情々地ふ王も法撲〳〵。潛車せて齋を。實ふ奏聞ふ達ふ。と
奏き。斉陽の形勢ふ驚きぬひ。徒てハ憑多が示〳〵つる異常の
由も詭あ〳〵で。端天の擁護ありるもの歟。思議をぐうるぬ事ふれバ。
權且刑を止りて。憑多の帰るを俟こて可けまを。遊莫陽應
斉特を憑こて。車の疑を這解ふ。公然とハ措辭し。
月景城中へ禁錮て。爲將軍ふ預くべ。憑多還〳〵バ真偽
邪正。立地ふ冰釋せん。余るり〳〵と既ふして。齊慮を決めぬひ
〳〵うバ。爲將軍を徴ぬひて。詔令のふふそ。爲將軍の拾び礫ん
うこあ〳〵。躰て耶輸陀羅女を蓮華座よりやを〳〵下〳〵まうして。
王命ふ隨ひ。月景城へ。後厥へ。俾ひ入まう〳〵。寔ふ
不測の天資ふ。沛命の恙あきを。夫婦斉一祝をさく。脆きハ紬
の露時雨ふり汙年の緒垂くも。常ふ異るる妊娠を。遐むとまを

提婆
讒言を
流して
耶輸陀
羅女を
火中ふ
墮す
耶輸陀羅

諸天の
擁護
明ふ
婦德
を
頭を
耶輸陀羅

幾貫て。浩る憂国も宿因ら。何と解由嫌行の。世をも人をも恨まずと。察めてぞ耶輸陀羅女は。只懐氣く暮さ。たゝ子のおん跡ありけりと。堪留めぬ思ひ川。涙の衣ふ盈も理と慰め難て。爲將軍夫婦も共ふ涙伏しが。主従心を励まし。勅命ありける大王の。寛有ハ得難き仁慈なり。身を全うして後疑ひを解ん時の有まゝと。思ひくして後厳ふ。耶輸陀羅女は只一個藝籠せぬふを。傳きとて。ふ乖更ふ。爲將軍の妻一個のゝ。宅ふ幸閑ふ者もなく。寂寥として心憂。月日を送せぬふ。程ふ既ふ一年半も過て。竟ふ平産しぬひしに。王の係き男子ふ在しぬ羅睺羅尊者と稱せしハ。遠若宮の御事なり。たゝ子世ふ在しまさば。満朝の百司百官諸国の小王も慶賀ふ来づたを。嚮の奇瑞ハ知るものなく。疑ひハ来解やねば。主ゞふ知ねば。捨糧よと。世の人毎ふ郷邨のゝ爲將軍夫婦の宅ふ。祝もる者ハ垂りけり。浩る涙を風聞ふ。耶輸陀羅女の心苦しさ。嘆んぞも。たゝ身のある果と。帰ちつも。心ひとつふ若宮を。たゝ子のおん遺骸と。愛傳き。憂が中ふも育て。つゝ。遠和子成長ぬ。うち連立て育ふ関く。檀特山へ分登いと。如何ぞ。鑿き巌をも。尋て。たゝ子ふ一回ハ見奉らゝ。おんと。教果ぬたゝ憑くを心中ふ。憂年月を送りぬふ。おん心として可念き。

一書ふたゝ子出家の後三年過て羅睺羅生とも云ふ。佛ふ行程ふ依て六年後とも。殘ふ曰羅睺羅。如来出家六年已後始出母胎。如来遊良又家之日羅睺羅年始六歳ニ云是を如ぞ。

廿四　たゝ子捨身の難行を苦修しぬふ并禅宗坐禅の始

有たゝ程ふ憑多たゝ子ハ。所遺物の数品と。儀人車。運ふ拝しぬひて。深居天の化身ある。攝師より授ひぬひし。法の衣ふ。おんを纏ひ。慈弓の杖を。所力ふ。番けき言葉を向上ぬひつ。嘆そゝ。岩根淵

分々々拳足をのゝふて。別きを情こと奉りて。眼停まつるを車
麗の語音。嘲ふ徒陸が凄の音の。務紙し。響く徹さゝ。澎ふ
幽けく滅ゆくをも。浄念ふ懸ぬをば。一心不乱ふ巓を望こ。
一旦絶頂を端定めて。備神仙の柄をとて。尋めと思しつ。人逝
絶て淫ゞふ。曼獲氷ふ泮消の。豎溜ふ御足も。凍て板もし
ぬふ。狂ふ。寒風。障氣。肌膚を犯して。心地死ぬべう思しを。
浄心を励まし。ぬひつ。葛ふ携り嵒を傳ひて。千章万苔ふ疲
労ぬひし。汗身も厭たゞ樹の下陰の。苔滑ふ溜ふる。岩ふ
然淫を驚淫つ。章くも巓ふ登りぬくば。丼時歳四の章とゝ
經ふけん。樹木精怪と繁茂して。絶氣の輿ふ動まゝば。睦輩
ぬひして。彼懲業の蜜殺ふ。命ふ恙存しまきて。翁呼を經
歴しぬひつ。嵩山中の勝景ふる。除探宝ぬふ找こぬば。青

壁嶽々こる白雲の裡。樹林森々こる青苔の上ふ。童教鄙骨の
老翁あり。木の葉衣を身ふ纏ひ。端坐結印して眼を閉寂莫こる
為体ハ。是や賢道垂迹を修もこる。神仙ぬ〳〵こんと思しぬひて。たゞふハ
仲の老翁が眼を用くを後ぬひつ。幾心修行微さまく欲き間を
待ハぬひしこゝば。神仙ふ大ひふ賞讃して。俺ハ是阿盤々仙ぞ。垂
上菩提の有を究め。一切衆生の苦を救ちんふハ。下根凡夫の
成し易ゝぬ。捨身の行を修もべ紀るりと。師弟の約を結び
ぬ〳〵ば。たゞ子ハ深く悦びぬひつ。躰て仲髪を剃落し。頼くハ
一切と共ふ。此煩悩を測べしく。誓をぞ立ぬふ。仲志の堅固なる
を。神仙深く感歎して。瞿曇沙弥と呼微しつ。教戒最も
厳あきべ。たゞ子ハ二千五百戒を。慎んで持らせぬひ。菩上道を修
しぬひ。雖行苦行ふ剃ぬひし。仲髪の迹の月代ハ速くも暢て

穢栗欲蘭の花に異ならぬも。夏は炎暑に編こしを。久く永堅
に佑しが如き。昨日に変る御容顔の。浅猿しくも將弱き哉
什麼煩惱を彩んなふ。左子落師去ぬひしより。此法佛道を
学ぶ者。咸刹聚して僧と成は。西域の風俗なり。皇国の往時
なは無うりしを。佛法二国に傳来しそより。崇峻帝の御宇に。
司馬達等の子。多須奈といふ者。剃髮して。名を徳斉法師と
號り。是 本邦人の出家して僧と成りぬる始なり。同新休
題。慈多左子の曜曇沙弥に。阿羅々仙に隨ひ奉ひて。薪
水の勞を厭ふ。水の實を食し。石蜜を嘗して千年を苦
に。維行を懈怠なく修しぬひ。既に慈界の垢を去て身神
清淨に成ぬひしかば。躰て阿羅々仙は真宗より上道の神仙
伽羅々仙に左子の教を讓るに。左子亦伽羅々仙の教

導に隨ひぬひ。邪魔秘密。清淨窮の。二窮除伽を修しぬ。
勤行疑に勇猛なるを。其本師さく。却に。及ぶると感歎して。伽羅
羅仙亦。舎陀羅摩師耶仙に。左子の教導を捨しけり。余多
左子は亦更に。舎陀羅摩師耶仙の教に。深ひ不変。實相
隨縁の。三真如を行ひぬひつ。一百日夜は坐せ。終に起ることを許
さるを。一百日夜は立し。終に坐ることを許さるを。一百日夜も
目し。終に睡眠ることを許さるを。行中無心無云ふる。雖行を
修しぬに。水を飲さく禁ずらるを。僅に木の實を日に一度
食しぬに。白玉の如き御肌膚も。日に黒く風
に荒なへば。肉尽骨露て。枯木の似く。に痩ぬれども。自精神
を励ますぬひつ。二伏の炎暑を忍び。厳冬の寒苦を凌して
勤行怠りぬぐること。登山しぬひしより既に。茲に六年

を經ゐまで。非々想定を習ひ。今は其法味の真意を得ることを得ぬひーゞ。是永寂の休處なゝもと菩提ーぬひーゝ。三師に別て。獨參頭山に進ぬひ。妙法靈泉の邊なる。金剛石上を掃として。日に胡麻一粒を食ーぬひつ。朝に山に登て嶮渡なる。危き巔を經歷ーぬひ。夕には水金剛石上に。四りて。結跏趺坐ーぬひ。無心意。無受行を修ーぬに。雪降積る寒風の。烈しきも畏ぬに。石上の坐に終夜睡眠を忘だ坐禪ーして。端天に敵命ーぬひける。是や達磨ゞ堂ひぬる。面壁の行ふーして。禪宗に用ゐる所なり。夜を昼を。ふらぬ。不惜身命の銀鞋辛苦。勤行憂も。悔怠なくて。因位果位。二時の。三業九品を修ーぬふ。最初の狂ハ毒蛇惡獸害を做さんを形勢なるーも。彼慈弓悲矢の威德に恐れて。近づくことを得ざるーゞ。畜生殘害の情に。後に其德に感伏して。敬て。妨せざりける。蓮に三十三天の中。第六天に魔王あり。遍に衆子が勤行の。為体を見て大ひに驚き。彼正覺を得て。妙法を弘め。一切衆生を利益さゞ。已魔道滅をべし。と思へば。其身を美女に變じて。下界に降りて。坐禪ーぬふ。衆子の傷へ。我を寄。情を含ゐ媚を飛りて。衆子を惑し奉り。淫慾をめて。戒行を。妨げんと為つれども。當時衆子に既に。多年苦行の功德に。神通を得ぬひ。天魔の障碍なりと知ぬひ。外面如菩薩。内心如夜叉と。嘗へぬひつ。波悲業をなして。佛心強くも魔王の美女が肩を撲地と撃ぬへば。花顔柳姿の美婦も。忽地本形を顯して。身の長三丈餘なる。惡鬼の猛相畏しく火焔を吐つ。衆子を目眼へ。

悉多太子
ちゃくたい
悪魔
太子の
勤行を
妨ぐ

魔王変化
ばうちの八公主

今ハ化身シテ歌くとも。力ヲ及ボシ難ク思ケン。第六天ヨリ向上ノ大唱一声叶ト斉一。奇怪異形ノ悪相ヲ現ス。魔種ノ眷属数百萬。ゴウ〳〵剱戟ヲ振回メウシテ一瞬間ニ充隆ス。太子ヲ中ニ奪ヒ。迅雷ノ逆ラフ如ク。縣波ヲ飛リツ正法ヲ。妨ケンと闘ケバ。震動天地ヲ裏ム。其猛ノ光ヲ端然ト。太子ハ毫モ動顧ナシ。諸悪莫作。修善奉行と。微妙ノ声ヲ唱ヘ。ゴウ〳〵ハ測ヤ尊解リ。金色ノ光ヲ放ちヌルホド。数萬ノ悪魔外道ハ眼ヲ射ラレテ伏特ビ。器械投リテ周ヲ忍ヒ。蓮ヲ踏テハ逃ル。充囲リテ其身ヲ射。火焔ヲ降セバ蓮華ト化リ。毒風ヲ吹セバ香風ト変シ。更ニ太子ヲ害セントスル。能ハザルヲ驚キ周章テ。衆魔第六天ヘ逃回リシ。ゲニヨリ度々方便ヲ更テ。太子ノ修行ヲ妨ゲムとも。徳光ハ敵シ得ざるバ。魔王ハ慚愧後悔シテ。竟ニ降参シ。うりけるゴウ悪魔外道ヲ。正法道ニ降シ。ひし。太子ノ威神力ハ既ニ。茲ニ十二年ノ雖行を。修シ。ひけるゴウ徳ヲ

廿五　二句の偈を得て太子成道并摩婆の名義

太子出家ましくして。檀特象頭の両霊山ニ雖行を修シ。ゴウ。既ニ十二年を過る。役ニ毒蛇悪獸の類ハさらなり。天魔の障得ざる。正法ニ。降シ。ゴウ徳光ハ。ども。年来日ニ胡麻一粒を食シ。ゴウ。ふのこ。ゴウ。身神皆ク疲労ヌ。ゴウ。真道を得ぬ。ゴウ。今既ニ。苦行の如ハ。正解脱を得るふ。ゴウ。因食を受て後。成道をべしと思シつ。霊ニ。沐て澗と垂き。尼連河ニ。近リ。ゴウ。尊身ニ水を灌ぎ。ゴウ。抑

しも水をもて造りうる。率塔婆一本流さまゝ。たゞ水を撥分ぬひつゝ。ゆくゝ引揚見なくば。諸行無常是生滅法生滅々已。寂滅爲樂と。二句の偈を淡墨もて記しうるを觀ぬるとき。是や正しく紀垂水成道の要文なりと觀喜ぬひつゝ。廓然として大悟しぬ。余もし率塔婆の要文ふ。たゞ正覺を得ぬひしも。其学道を資ぬふ。淨居天の神明ありきゝや。響ふ授りぬひぬる。慈弓悪業も今いまや要垂死物と思しあらうべ。澪の丘ふ埋ぬひ。开ゲ上ふ伴の率塔婆を立置せぬひしゝ。後ふ黄金の高額と変じて。千載不朽の霊地となる。天塔岡と唱ぬ做して今猶舊跡あり。しかとを、人遠敬を発して曰。始終たゞふの学道ふ新まで淨居天の助めゝ阿羅伽羅。精陀羅三仙の導師ふも及ぶべゝゝまで寒暑を度ぎ食を

断。怠きふ在ぬたゞとも。原来權者の尊儼ふ在せば。自然ふ悲して正覚を得ぬたざる衰垂ゝゝぞやいと論ぜるい悲しく。頑才き俗心あり。浩る小量もて奇く妙々ある。不可説不可思議の法の道を。爭で窺ひ知るべゝゝん。十二年の苦行も。威淨居天の神慮ふて。彼二仙も恐らくい。淨居天の化身ありべし。古人の言の葉ふ。苦中の苦を嘆せざまば。人中の人ふ成難く。二ゝび骨を折て後。良医と為と云まゝり。余もし率塔婆ふ偈を紀して。たゞふ示さまし神慮い垂常迅速を示しぬふ。隠意ふこそ有んぞゝめ。抑率塔婆ハ死骸を。葬しうゝふ遠墳ありけまば。昔日人間一大事の死相を示しぬひぬる。生者必滅の理の後を示しぬひしゝ。ぬの欲余もバ率塔婆ハ　本邦ふ。墳といふ梵語あるを。今ハ俗人

推あげて。ホをめて。低ふ其形を。造りて。彼養ふ立るとのこ。
車塔婆と称ハ。誤てり。若別ちて号る紀ハ。ホの車塔婆。
石の車塔婆といふべくん。今俗ふいふ車塔婆の形ちハ。
五輪の富塔を表せるなり。是を梵語ふ蘇偸婆といふ。車
塔婆ハ直立の墳をいへり。亦金剛経畧流ふ。塔者梵語
卒都婆此云高顕云云。高顕ハ。卒都の。今俗ふいふ車
塔婆なり。卒是窣堵波の。大日二昧耶の形ふして。九字
了字の五字を書し。其長定法。二尺七寸ふ低るハ。二十
七尊の表示ハなり

廿六 世尊毒龍を降して正法を弘む并竹林精舎を営

卿流悪多太子の瞿曇沙弥ハ既ふ正覚成道しぬひ。浄駆ふ
金光を放ちて。三千世界を照しぬひつ。三世過去現在未来を観徹しぬふ
ふ。先や神力方便ゆて。我子ふ等し紀三界衆生の煩悩を
救ちんと大慈悲心を發しぬひ。ちん齢二十歳なる。十二月八日
の暁天ふ。初て下山ひしなり。世ふ出山の釈迦と称て。寫し
奉る尊像ハ。當時の御姿なり。余る程ふ浄居天ハ。躬て
太子の過てるを。畏しぬくバ。神通をゆて。摩竭
陀国なる。善生村の里人們ふ。熟いかとれく言ものから。浄飯
王の太子。發心修行の為ふ。十二年の艱難を經て既ふ正覚
成道しぬひ。衆生引導直指滅佛道の。卒頭を亢さ世ぬバ。
一切衆生を。俗度せんと。今這里ハも来隙とぞ思や。三界
六道の。大恩教主ふ在しませバ。世尊南無釈迦牟尼如来と
尊号し奉り。浄好清き食を供養して。垂量の幸福を得ん
りのと置々し紀まで里人們ぞ心を合して清浄ふ。乳糜を

蘇てぞ候居りける。乳糜とハ牛の乳をもて煮ぬる糜のことなり。製法ハ數
牛の乳を二百五十の牛ふ飲せ〻二百五十の牛の乳を百二十五の牛ふのませ〻百
二十五の牛の乳を六十の牛ふのませ〻六十の牛の乳を三十の牛ふのませ〻三十
の牛の乳を十五の牛ふのませ〻十五の牛の乳ふて煮つゝきの米と
糜ふ煮るく丹誠おこして煮つゝくこゝく佛本行經ふ見へたり 得ふく世尊
来ぬひしを。里人們見奉るふ苦行ふ疲ぬひしをどし完
明輝き威相莊嚴。寔ふ尊く在しまとふぞ。大家恭敬礼
拜しつゝ。彼乳糜を金鉢ふ盛。金鉢ハ須鉢の金を以て造る器
めをバ以下略ふ 溢て歎まつるをバ。世尊悟ひ受ぬひつ。衆人ふ對ひ
ぬひ。三寶供養施主於當來安樂无病多福長壽於來
世生人天受諸快樂。兄頻を唱ふぬひて。乳糜を受し
ぬひしうバ。衆人隨喜の涙を流して。愈信し奉るふぞ。鹿
野苑ふ入ぬひて。四諦の法を說ぬふ。是ふ因て道果を得る者
億萬人ふ遇びたり

周ふいハ。四諦の法とハ。苦諦。集諦。滅諦。道諦の四をいふ
なり。苦諦。集諦ハ。世間因果を說。苦ハ果。集ハ因なり。
滅諦。道諦ハ。出世間の因果を說。滅ハ果。道ハ因なり
剃て世尊ハ鹿野苑ふて。衆人を化度しぬひしうバ。躰て遠地
を立出ぬひ。婆羅門城へ趣きぬふ。半途ふして日の暮けり。
當時兄弟二個の道士あり。兄を優樓頻迦葉といひ。次を伽耶
迦葉といひ。未を那提迦葉といふ。世の人三迦葉と唱ふ做しけり。
大迦葉とハ別あり混ぜべからず。一書ふ兄弟ともふ仏弟ふ長て。神通廣大
優樓頻迦葉を大迦葉とまるめハ誤りなり
なりけるをバ。因人深く崇敬せり。浩をバ兄の優樓頻迦葉ハ。
神通自在を自恕して。我こそ天下無双なるゝぬと我慢自負
して在ふ。遠邊ふて行暮ぬひし。世尊ハ躰て優樓頻ゞ許
ふ一宿をぞ乞ぬふ。迦葉諾ひ迎へて。對面しつゝ熟觀るふ。三十

釋尊
毒龍の
業火
佛光ふ
滅せ

二相具足をこそバ。是凡人ゝ有べゝしと。心中大ひに驚き
思ひ。何国の人ぞと名を問たまて。世尊ハ遥しゝ垂く。
明白ゝ名告ひつ。慶心菩提の道を求めゝ。十二年の修行
を経て。垂上真正の道を得たまバ。大千世界の一切衆生を。
化度救さまく欲する由。宣ゝを聞よりも。優婆頻迦葉心の
中ゝ。原来誕生の時諸の瑞應現ゝ学むぞして。諸藝ゝ
達せりと世ゝ聞えし。慈多たゝありけるゝ。然ども世栄
を捨て菩提を学ぶへ。其道迂きくして。我ゝ真の道ゝ如ぞ
遮莫栄ゝ行力を。試ゝやと思ひしゝバ。世尊を敷きて這年
来。己ゝ法力ゝも退治難き。毒龍の栖ある。石室の在けるを。
世尊の明ゝ牀ゝ宿へけるを。世尊ハ敏ゝ神通もて。毒龍の
栖ある。知覚ゝ在せども。世尊ハ恐怖ゝ一とあく。件の石室

ゝ入ゝひて。結跏趺坐して在せる様ゝ。忽地毒龍頻を動て。
長一ゝ丈ゝ輝尊を。呑食せんを勢ひあるゝ。世尊の威徳ゝや
恐きけん。近づくことを得ざりしゝバ。頻ゝ火焔毒氣を吹ども。
世尊毫も動ゝ給ぬ。毒龍益怒逆しつ。首を逆立て搏て。
猛火石室を焼毀つゝ。世尊ゝ真正の金剛躰ゝ。世の煙も
羅らを。端然と安坐しゝ給ひ。毒龍ゝ対ひ大ん聲云く一喝し
給ハ忽地ゝ世尊除の大毒龍。寸の小虫と成て毒くを。世
尊令降ゝ給ひ。二飯依を授給ふ。法りしゝ様ゝ石室へ
蚕所焼とゝ成りけるを。優婆頻迦葉遥ゝ見つゝ。掌を指て大ひゝ
笑ひ。憐むべし瞿曇沙弥。十二年の修行も。涙ゝ成らて所と
ある。寂滅為楽ハ本懐なゝん。笑止々々と嘲りつゝ。徒弟を連
て尾隠と成し。石室の跡を来て見るバ。薬立さる盤石ハ皆悉

粉ふ火碎て。累々こうる瓦砕塵埃。燈ひの除烟来ごと立冲て。煩熱四方を焼けきバ。寧も迫づき殺うる中ふ。豈側らんや殺うるハ。自若として在しまし。尊躰ふ纏ひぬひぬる。ふの葉衣も聊集ぬ。繹の奇特ふ殊然こうる。迦葉師弟を商して。世尊ハ完ふと舎光ぬひ。毒龍身の業火を起して。石室ハ焼と雖も。那我正身を焼得べき。彼一喝ふ降伏しこきバ既ふ悪業を解脱して。今ハ遠神冲ふ在。と指示しぬひぬるを。迦葉師弟覩き覲て。苔髮るき悃きつ。思たて世尊を仰見きバ。白毫の金光赫々こうる。羞明ふ我知らぎ。大家地上ふ平伏て。恭敬礼拝ちこうらう。当下優楯頻ハ称るの。神通ふ感伏して。慢心を慚愧しつ。頂くハ大知識。我輩を教導ぬくと。實心ふ服依しけまバ。世尊その信心を賞讃しぬひ。髮を剃せて弟子とちぬ。這義を聞傳て伽耶迦葉。那提迦葉も。仏弟とありけきバ。其徒弟も数百人。咸仏門ふ入しこう。各法眼浄を得ぬるが中ふ。三迦葉兄弟ハ。阿羅漢果を得こうけを

因ふいふ。弟子とハ其師を。父のごとく尊こ。兄のごとく敬ひて。其身ハ弟のごとく。子のごとくふ隨従しつ。教を授る故ふ。弟子といふく。亦学ぶ道ハ其師より。生ぜる故ふ弟子と称を。法きバ一字の師こうとも。疎ふ思ふべうこ。師恩の深きこと。親のごとく兄のごとし

當国の摩竭陀国王頻婆沙羅王。婆羅門城ふ在しまして。三迦葉が称尊の。徒弟と成しと聞ぬひ。原来浄飯王子の法徳波神通廣大ある。三迦葉の上ふ。其説法を聴やとして。世尊を城中へ請ぢまいこし。説法を聴聞して。因果の道理を

給りぬひしより。因人の罪を宥し。大ひに施給の事を行ハ
まし〻ぬ。国人愈如来を尊ミ。説法聽聞に清素る者。大ひに
釋集しぬるに。祇沙王諸臣に命して。廣き伽藍を設え
らひ。一宮の精舍を賞ゑて世尊に献じ。ぬひにまハ世尊深く
感納まし〻。数百人の徒弟と共に。遠地に移り住ぬひ。伽藍精
舍と号ぬひて。倍世人を化度しぬ。當時舍利弗と異儀を者
あり。其母眼最浄く。賢の眼に似さまバして。幼稚より舍利と号
く。舍利と八賢の事ハして。天竺の諸人。舍利女妊娠しより才
智弁論。順日に百倍ましを。一相師是を觀て是ハ聖子の
智德に倍る。故あるべしと言まし〻ぬ。果して男子を産しぬ。
母の名を其姪取て。舍利弗と号ふけり。弗とハ義ふし
て。日本語に称る時ハ。取も轉さまで舍利の弗あり。梵語に舍利

弗といふ。幼稚より才智弁舌。衆に超て凡庸なるまで。博く諸論
に通曉して。外道の法を学びまし〻ぬ。神通に廣大なりしが。世尊
の教誡を聞傳て。是や垂上真正の。妙法と知覚しぬ。
同学の友目連も。相倣ふて共倡ふ。外道を棄て二百人の。
徒弟を連て。竹林精舍に。清来て佛門に入しより。後十大
弟子の隨一に。智慧第一と称せらるまぬ。高名の道師彩の
ごく。威法弟と成けまバ。佛道弥々に推弘まりて。遠近の
老若男女。竹林精舍に。群參する者。日毎夜毎に繁しく。
是に迎に。樓も。溢へ。滅らさるまでなり。茲に婆羅門摩訶迦
葉に。是大迦葉摩訶迦葉と。清ふしてもるに。是大と者く。獨山中に分入て。
修行して。在世に空中より。浄居天に。妙なる音聲を發し
ぬひ。釋尊既に世に出ぬひぬ。速く往て師と仰ぐべしと。告

ゆふを聞くや。摩訶迦葉大ひに歓喜。翠天を辮して下山し。竹林精舎に找こへて。世尊を恭敬礼拝しけり。三世観通しゆふある。世尊ハ疾より大迦葉が。法門に飯まぐれを。紹ぎて在せしうば。善哉々々真の比丘。迦葉找これと宣ひつ。玉座を分ちて摩訶迦葉を。御側に坐させゆくば。自除の徒弟が預りて。新参を恥まぢ。紫ゆふ御意ハ。奈何ぞやと問奉るゆふ。世尊示しのゆふ。吾法の道を六萬歳に遣さん者ハ摩訶迦葉が。功徳廣大の力あり。と宣ひ。を然もゆふと。稟ものの間覚東なしと。思ふ徒弟も多くしが。其ゆん間の違ものを。後ゆふぞ思ひ合しける。

廿七

念孫濫觴貫玉の数法并百萬遍の功徳

世尊ハ竹林に在しまして。倩思しゆふ。初四相生老病死を厭ひ。

幾心して。慢くも父大王。姨母夫人を捨まつり。志も。今ハ修行成道しつるとバ。且父母の国に還りて。父大王姨母夫人に見参せん有べうぞと。数多の徒弟を引連なひつ。竹林精舎を立出なひて。迦毘羅衛国へ趣きゆふ。道をぐるも説法しゆひ。国人貴賤の差別なく。大ひに教化しゆふ。婆羅婆婆国の波流梨王ハ。別て仏法を信じゆひ。長く世尊と同国に抑留ま欲しく思ひゆへど。一且ハ父母の国へ還幸しゆふと。余もるうへハ。理なく抑留に力なくも。猶別を奉るを。酷く悲ひ法。法義深度の端をも。如来に別を奉らバ。就ハ仏果を得らんとぞ。預くハ法要を遺しゆくと。乞ゆふ。志の最切なるを。世尊深く感じゆひ。大王若煩悩を。滅せんと欲しゆんぬ。ゆふ。慢子告提梨の宣く一百八顆を。汲ゆふ宜しく貫しゆひて常御身に随へゆひ。

目連
もくれん
世尊
せそん
大迦葉
だいかせう
羅睺羅
らごら
世尊故国ニ還りて遺體を知る

鹿野
いぎ
瞿陀弥
くだみ
憍曇弥
けうたんみ
淨飯王
じやうぼんおう
好容
こうよう
芙蓉
ふよう
耶輸陀羅
やしゆだら

心中ニ南無佛陀南無達磨南無僧伽名と称へなして。伴の
木槵子を一子宛。漸次ニ過ぬ〳〵日毎ニ真数二十萬遍滿
ぬ〳〵。身心乱を諂曲を除き。壽終をバ忉利天ニ必生
ぬべく。若百萬遍過ぬれば。當ニ百八の結業を除て常楽
の果を得ぬべしと。懇切ニ示しぬ〳〵。波流黎王大ひニ
感び。遠く城外まで。釋尊を。自送り行せぬひつ。躰て別を
奉ぶしより。木槵子一百八を。数ニ貫して一子〳〵ニ過ぬひ
つ。一心ニ。佛果を念じぬひける。是数珠の濫觴なり。
然るニ古今原始ニ。後漢の章帝の時西域の僧。始て念珠
を作ると見へたり。思ふ〳〵ハ是彼僧が始て作つ。ふ有ばして。
其時始て中華へ。持渡て来つるなるべし。日域ニハ百済より。
佛法渡りし時既ニ之あり。其法一百單八の数ハ。一年十二ヶ月
廿四氣十五日を一氣として二十四氣を一年とす一月の節と中ニ五月あり曆を見てあるべし七十二候五日を一候として七十二候を一年とも也の義と為るこ。然るをバ今俗間ニ童児を集め一僧を清
じて。百萬遍を汗ふものハ。其功德の頑ひある事波流黎王
ニ示しぬひし。世尊の御言葉ニて有るべきの〳〵

廿八

若宮佛衣を敷て辯説并羅睺羅の因縁

却説世尊ハ数百人の。徒弟と共ニ舎衛国の境ある
波夏祇耶といふ街まで。托鉢して来ぬひける。遠由迦毘羅
城へ聞えたるハ。淨飯王ハ其最初右子出家しぬひしより。
現世でハ相見ることも。絶ハさる歎と遠年来腸を断たりある。
歎きニ沈こぬひしニ。今や学道成就しぬひ。釋迦牟尼如来
と尊称せられて。国人の飯依仰大なるあるこを。古郷へ帰り
来ぬんとハ。測らざり知と歓喜の。眉を開くや優曇華の花咲ち

得つる心地しつゝ速ふ清招をべしと烏陀夷ふ勅使を命じ
ゐひ迎の車駕ふ五百人の宮人を副らをて波優波耶く
遣しゐゝ烏陀夷ハ頻ふ路を急ぎて速く波地へ近りし程ふ
世尊ハ遠地ふ双垂ち給ふ富家ある者と
嘆傷を者ふ尊清せゝをゐひしーくべ則ち其家ふ入ゐひて
説法教化しゐふそ數百人の徒弟們も咸その弟裡ふ寓
て在り

因ふいふ西域ふて長者と号ハ富商大賈財を積こと
鉅萬ある豪族のごとく中華ふていハ德備ある人を
推尊うて長者と称を夏国も亦之ふ倣ひて都て
尊貴の号ある迦世ハ
長者といゝハ富る人の事とのゝ思ふめり蓋多くハ天

竺ふも十德ある人の称ある
烏陀夷ハ躰て伽陵の許へ勅使の旨を通じけをべ世尊深く
歓喜ゐひつ烏陀夷を迎く呂ゐふて別業の後園を淺
〻を臨ゐひ長途を勞ひゐふそ烏陀夷ハ敬恭礼拜して
世尊の法顔を見奉るふ美玉の如き貴體も多年の艱行ふ
最皓う痩黑くゐひしかハ昔の面影在まをども端嚴の
法相尋常ある〻ど數百人の阿羅漢が中ふ在しまを貴客淫
衆星連珠の大盧ふ根盤明の異名明輝を揚が如く自然顕倦を
隨喜の涙ふ袂を沾しつ聲ふ乗ゐくと聞えようを世尊
ゐひて仰ゐるかう吾身昔日と等しうゝそ豈車駕ふ乗
をべ孫ふ親子妻妾の恩愛の絆ふ引をて放因へ近ゐふ
ゐゝをべ下化衆生隨縁真如の典ある也ハ少時師弟の礼を着き

同宿と滅して色のあんと。徒弟何ふも示し指つ。海も遠有心
得よと郷ふ示しぬひつ。諸羅漢と一般姿ふ草鞋を穿
ちて伽陵長者が茅宅を立ぬ。人ふぞ。烏陀夷も已事を
得ぎ客人何ふ。前を澤ハして供奉しけをバ。當時法門ふ
飯もつる者。一千五百の人数あり。其衆僧共倶ふ。師勇斉一
徐行を。諸人早く聞傳へて。如来を拝ん奉らんと。数百里
の路の間。両辺機の羅る如く。寸地も隙さに押合て。坐し
つ。行列を見るもの間。是を世尊ふ在ますと見奉るべく
も有ねば。衆人望こハ共。とも、皆何とふく尊くて。偶仰
低頭せつるハ無し。日を経て世尊ハ迦毘羅城の都へ入せ
ぬひしうバ王命を奉ぞうる。烏將軍ハ数千人の官人を
従へて。急く迎へ奉りつ。摩耶夫人の霊を頂めし父陽ふ

ある青庵殿へ。清ド入奉をバ。世尊ハ衆僧ふうち雑まて。
荘厳善美を尽しうる。玉殿ふ昇ぬひ。役の法坐ふ着
ぬ。當下浄飯王ハ憍曇弥。摩訶波闍波提の二夫人。鹿野曜
陀弥の両新宮。昔日ふ結ぶ。数多の女宮と共倶ふ。
三大尼。月郷雲客。百官。今日を曜と衣冠を飾り系
列して。如来を拝まんと思ひしも。世尊ハ思ひ一石義ありて。
所爪の別を為しぬまで。皆藤布の墨染衣ふ。木葉の袈
裟を掛うるの。日ふ黒く疲疲うる。一様の沙門ふをた。
何をを開と分発て。大家悃を果ふり。茲ふ第二の妃
耶輸陀羅女ハ。おん煩うしくも。太子の遺骸を。庵迎へぬひ
て。摘荒殿ふ禁掃らをて。烏將軍夫婦の宅ハ。偉防ふ
者も。配流ふ。等しに親ふの薄命を。嘆きふ沈む。鬱鬱憂

幸門を送りぬひつ。今日あんたの子還幸しぬひ。青蓮廏ふ
へふと、蘭臨びふ就て、来。猶悲しさも十寸鏡ぐるぬ心を
紛しつ。ねバ。上ふも まぐ紛ひぬて。たの子還幸ましまを
鹿野。瞿陀弥の両ふハ。痕ようあん泥法ぬひしふ。妻ふ
紛うせぬぬとハ。世ふハ惜き限ぞと。恨帰ちつ泣て。綾り
も敷ぬ袖の雨。晴ぬ懐ひを此時ふ。干さぞハ何時ら湯衣を
暇累つ。と尋思しぬひ。烏将軍の妻をめて。橋曇弥夫
人の御許へ。妻も如来を拝ま欲しく。嫌き御兎を夢る女う。
頻ひ上侍ると。頻ふ歎ぬ。夫人も有難き哀きふ思
ぬて。嫁ふ加入らきしうバ。耶輸陀羅女ハ喜しくも。赤面
煩き心地ふぐ。今茲六歳ふ成らせぬひ。若宮を連ぬひ
昔時たふが宮中を。偲びぬさせぬひ。深へ。遺し措せぬひふ

けるふ。御衣と情々地ふ勢へぬひつ。数千の嬢女ふらち雑まて。青
蓮厳程の末席ふ頻えて在しぬひしぬ。同躰一様の羅漢の。
如来を見分雑うるふ。人々ふ眼を見合を此時ありと
耶輸陀羅女ハ。若宮を引寄ぬひ。此年来慕ひぬひしぬ。おん
身ぐ實の父君ハ。那羅漢の中ふ在せり。尋て是を進らせ
ぬへと。彼御衣を遁與しぬバ。若宮ハ怜悧くも。釋迦心ふ
黙頂ぬひつ。仏の御衣を捧へぬひ衆くの人を掻分て。実
然と出ぬひしを。此ハ何者の子ぞ。玉座の前ふ。涙退けと
迫ぬ仰ぐ。推止るふも取敢ぬに。法坐の方へ歩ま。倚第三
の坐の羅漢ぐ前ふ。浮漂達で。彼御衣を捧ぬバ羅漢ハ
衣を受ふ食て。完ふと笑を含ま。不變真如妙覺無爲
衆生智願皆圓満と聲朗ふ唱へぬバ。忽地阿羅漢の形を

縛して。光明垂得の法相を現し。白毫より
白き毛の金光輝きて。殿中の七宝綿繡に映じ給ふ。繽の奇
特に方便までも。発ひ惠ひあひ給ふ。大王も夫人新宮。
女官嬪女堂上堂下の。群臣百官一感嘆して。大家恭敬礼
拝しけるに。一千五百の阿羅漢も。坐を遠巡て異に同音
に。本有本仏。南無釈迦牟尼如来と唱へ給ふ。遠貴形勢に
耶輸陀羅女は。嬉しさ譬へ法涙に覚に沾こつ。
我知らぬ列を為て。仏号を称し。世尊も法坐を下なひ。
父王妃母夫人と敬礼なひ。無比の慈悲に恃奉て。出家
做し先に孝の罪も。一切衆生と悪く極楽浄土へ引接あさん。
ふ。ふ。へば貴怒しなへ。備這雅児は異常に生まれて衆人驚
惑しつめるど。耶輸陀羅女は貞操なて。織衍有ざた女あるも。
昔出家以前より。既に孕して懐胎して。両三年費覚ど。六年過
て生まれしは。這雅児前世に嵐の巣完を。六日塞で出さざるし。
過因を速く果せるなり。命をば吾子の殺ある。遺物の衣を
見ぬくと。一偈を唱へ給ひにをば。不思議なる哉仏の神衣に。
忽地世五字の妙文織微せるごとく現まして。我去後六年過可
得善男子即是我因位為正汝生来大善知識と有けるを。
王も夫人も歓喜しなひ。結念初て氷解して。後悔懺悔に勝
ぬるまで。堂上堂下に羅列し。群臣女官も今ぞ知る。耶輸陀
羅女の貞操と。若宮の聰明と。歎賞して感涙を流さぬ
者なん無りける。続中鳥将軍は。我さへ鼻の高やうなる。
心地せられて居ざば。耶輸陀羅女は猶更に汚名を一時に
雪ぐて。十餘年の憂月日も。算つて見るば久方の。天涯

日彩を今日仰ぐ。歓喜面に顔をしを。然もこそあまと
王も后妃も。傷迫く徴めひ。種々に慰めひぬ。慈て世尊に
御母の。霊位を祀る奥に。諸羅漢と倶に阿羅尼を誦し。般
若を行じて帰ひに。薩終りて浄飯王に。如来師弟に奇
を供へつ。歓喜ひこと限りあし。若富に其日より法華と
微しひ。法名羅睺と号ひぬ

八宇郎原新迦寶孫巻之四 畢